

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：32501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13535

研究課題名（和文）福島県の震災後における新任保育者の成長プロセスに関する研究

研究課題名（英文）A study on the growth process of new childcare workers after the earthquake in Fukushima Prefecture

研究代表者

齊藤 崇 (Saito, Takashi)

淑徳大学・総合福祉学部・教授

研究者番号：20461725

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：震災後に困難があった場合において、新任保育者は職場の同僚や上司との関係の中で、転機が訪れ、保育者アイデンティティの確立に向けて安定した経験を得るプロセスが明らかになった。震災後の特別な状況での保育が保育者アイデンティティの形成過程に大きく影響を与えている。また、特別な状況からの脱却の中で、保育実践が少ない保育者は、先輩からの保育の伝達が行われ、更なる成長へとつながっていることが明らかになった。つまり、新任保育者の成長志向的なプロセスを捉えることができた。一方で、大震災から9年経ったため、対話型プログラム研修も日常の研修も研修プログラムを工夫しても、保育者効力感や省察の向上が認められなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東日本大震災直後に、新任保育者になった保育者の成長プロセスと関連している保育者アイデンティティの形成過程と自己形成プロセスを明らかにすることは、今後の災害における専門職の成長プロセスの解明の手がかりになるものと考えられる。震災後の新任保育者は、被災者でもありながら、支援者という役割をもっている。支援者支援を考える時に、特に、新任の援助者がどのようなプロセスを辿り、成長志向的に専門職として活躍していくのか、また、特別な環境下において経験できなかった専門的な経験をどのようなプロセスで取り戻すことができるのか、さらに困難を乗り越え、どのように成長していくのかを明らかにするための手がかりとなるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In case of difficulties after the earthquake, it became clear that the new nursery teacher had a turning point in his relationship with colleagues and bosses in the workplace, and gained a stable experience toward establishing a childcare worker identity. Childcare in a special situation after the earthquake has a great influence on the process of forming a childcare worker identity. In addition, it became clear that the childcare workers who had little practice in childcare, while getting out of the special situation, were informed of their childcare by their seniors, leading to further growth. In other words, I was able to capture the growth-oriented process of new childcare workers. On the other hand, as it has been nine years since the Great East Japan Earthquake, improvements in the effectiveness of childcare workers and improvement in reflection were not observed even if the training programs for interactive program training and daily training were devised.

研究分野：心理学

キーワード：保育者アイデンティティ 自己形成プロセス 新任保育者

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 問題

保育者の成長プロセスを保育年数による直線的・一義的な指摘をした(文献1)研究がある中で、一方で保育者アイデンティティに着目した螺旋的な成長プロセスの指摘をもとに、探索的な成長プロセスを指摘した(文献2)研究も続いている。ところで、未曾有の震災後、福島県内では、原発事故の影響で特別な保育の状況が続いていた(文献3)ため、福島県の新任保育者は、他地域の保育者とは異なった不安定で危機的な状況の中で、様々な問題に直面してきたといえる。

(2) 先行研究

保育者アイデンティティの研究において、揺らぎを中心に「保育者は様々な問題を体験していく中で保育者アイデンティティを再構築」する(文献4)ことを指摘している。さらに、転機など、社会的状況の変化が、保育者の自己形成プロセスに対して影響を与える(文献5)といった指摘も存在する。本研究では、揺らぎなどの危機に影響される「保育者アイデンティティ」と転機などの社会的状況の変化に影響される「自己形成」の2つの概念に着目し、震災後の福島県の新任保育者の成長プロセスについて検討を行う。新任保育者に焦点をあてる理由としては、特に日常経験の影響を受けるのは新任者であることから、特別な日常経験の影響を強く受ける新任保育者の成長プロセスに着目する。本研究では、保育者アイデンティティを「保育者である自分」と向き合い、保育者である自己を自覚していくプロセス(文献6)とし、自己形成を「自己形成は自己Aから自己Bへの変化や成長を扱うゆるやかな成長志向的な概念(文献7)とする。

文献1

高濱裕子 2001 保育者としての成長プロセス 風間書房

文献2

岡本祐子 1994 成人期における自我同一性の発達とその要因に関する研究 風間書房

文献3

日本保育学会 2011 「災害時における子どもと保育」報告書

文献4

足立里美 柴崎正行 2010 保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討 担任保育者に焦点をあてて 保育学研究 48(2),213-224

文献5

香曾我部琢 2013 保育者の転機の語りにおける自己形成プロセス 展望の形成とその共有化に着目して 保育学研究 51(1),117-130

文献6

小泉裕子 田爪宏二 実習生の保育者アイデンティティの形成過程についての実証研究 保育者モデルの影響と保育者アイデンティティ「私は保育者になる」の関連

文献7

溝口慎一 2008 自己形成の心理学 他者の森をかけ抜けて自己になる 世界思想社

文献8

大谷尚 2008 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 - 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学 54(2),27-44

文献9

谷川夏実 2013 新任保育者の危機と専門的成長 省察のプロセスに着目して 保育学研究 51(1),105-116

文献10

杉村伸一郎 朴信永 若林紀乃 2009 保育における省察の構造 幼年教育研究年報 31,5-31

文献11

三木知子 桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究 46(2),203-211

文献12

池見陽 田村隆一 吉良安之 弓場七重 村山正治 1986 体験過程とその評定: EXP スケール評定マニュアル作成の試み 人間性心理学研究,4,50-64

2. 研究の目的

本研究では、東日本大震災後、保育が制限される等、特別な状況下で、今日まで保育実践を続けてきた福島県内の新任保育者に焦点をあてて、どのような保育者アイデンティティ形成過程や自己形成プロセスを辿ったのかを明らかにし、大震災後に必要な現職研修プログラムを提案することを目的とする。以上のことから、震災直後に福島県で新任であった保育者の「保育者アイデンティティの形成過程」を検討すること、震災直後に福島県で新任であった保育者の「自己形成プロセス」を明らかにすること、検討内容をもとに、福島県の新任保育者に焦点をあてた保育者研修プログラムを作成し提案することを目的とする。

3. 研究の方法

初年度は、震災直後に福島県で新任であった保育者の「保育者アイデンティティの形成過程」を検討するために、震災時に保育学生または保育歴 1~2 年目であった保育者（震災直後に新任保育者であった者）7 名（女性 7 名、M=26.7 歳、SD=1.50）に対してインタビューガイド（Table.1）をもとに半構造化面接を実施した。総面接時間は、5 時間 3 分 42 秒で一人当たりの平均面接時間は 43 分 23 秒であった（Table.2）。IC レコーダーで録音した音声データをもとに逐語にし、質的データを、M-GTA（Modified Grounded Theory Approach）を用いて分析を実施し、保育者アイデンティティの形成過程や成長モデルを理論生成した。分析にあたっては、質的研究に長けている専門家に、スーパーバイズを受けながら実施した。

Table.1 インタビューガイド

1.年齢、保育者としての経験年数、家族構成
2.新任期につらかったことや嬉しかったこと
3.自分にとって「転機だった」と思ったこと
4.保育者を辞めようと思ったことがあるか、その時の対応
5.保育者としての成長の実感
6.保育知識・保育技術への不安や戸惑い
7.理想の保育者像・保育実践
8.東日本大震災が保育者の成長に影響を与えたこと

Table.2 半構造化面接の保育者の属性と面接時間

	年齢	勤務先	インタビュー時間	保育経験
Aさん	26歳	公立保育園	47分56秒	6年
Bさん	30歳	公立保育園	35分25秒	9年
Cさん	26歳	公立こども園	46分45秒	6年
Dさん	27歳	公立保育園	58分13秒	8年
Eさん	26歳	公立保育園	22分45秒	7年
Fさん	26歳	公立保育園	62分08秒	7年
Gさん	26歳	公立こども園	30分30秒	7年

次年度、次々年度は、前年度検討した保育者アイデンティティの形成過程を踏まえて、保育者アイデンティティの類似概念である自己形成に焦点をあてて、震災直後に福島県で新任であった保育者の自己形成プロセスを検討するために、震災時に保育学生または保育歴 1~2 年目であった保育者（震災直後に新任保育者であった者）7 名（女性 7 名、M=27.7 歳、SD=1.11）に対してインタビューガイド（Table.3）をもとに半構造化面接を実施した。総面接時間は、3 時間 26 分 57 秒で一人当たりの平均面接時間は 29 分 33 秒であった（Table.4）。IC レコーダーで録音した音声データをもとに逐語にし、質的データを、構成概念、理論記述を導くのに有効な SCAT（Step for Coding and Theorization）（文献 8）を用いて分析を実施し、震災後の福島の新任保育者の「自己形成プロセス」を明らかにした。分析にあたっては、質的研究に長けている専門家に、スーパーバイズを受けながら実施した。

Table.3 インタビューガイド

1. 勤務先の保育園の保育内容の特色の影響
2. 同僚や上司との関係の影響
3. 園内外の研修会、研究会の影響
4. 地域や保護者の影響
5. 保育界の影響
6. 少子化、過疎化の影響
7. 職務上の役割変化の影響
8. 結婚や出産の影響
9. 東日本大震災後の経験の影響

Table.4 半構造化面接の保育者の属性と面接時間

	年齢	勤務先	インタビュー時間	保育経験
Gさん	27歳	公立保育園	32分8秒	8年
Hさん	28歳	公立保育園	23分16秒	9年
Iさん	26歳	公立保育園	23分19秒	7年
Jさん	29歳	公立保育園	31分51秒	9年
Kさん	28歳	公立保育園	36分36秒	9年
Lさん	27歳	公立保育園	27分19秒	8年
Mさん	29歳	公立保育園	32分28秒	9年

最終年度は、特別な状況下で歩んできた福島県における新任保育者の保育者アイデンティティの形成過程と自己形成プロセスの理論生成の結果を踏まえつつ、新任保育者が経験する危機を自身の専門的成長に転換させようとする行為である（文献 9）省察を取り入れた対話型アプローチの研修プログラムを作成した。そして新任保育者研修のプログラムの効果の検討を実施した。研究協力者を統制群 7 名（女性 7 名、M=27.9 歳、SD=0.90）と実験群 6 名（女性 6 名、M=28.3 歳、SD=0.82）に分けてプログラムの効果の検討を行った。統制群は、福島県の保育者がこれまで受けてきた研修内容のプログラムを受ける群で、実験群は、本研究で作成した新任保育者研修プログラムを受ける群とした。「アウトカム」の検討では、「省察項目」の「自己考慮」6 項目（文献 10）を尺度として「まれに」「たまに」「ときどき」「よく」「いつも」の 5 件法で使用した。また、保育者の成長とかがわりがあるといわれる保育者効力感を測定するために、「非常にそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそうは思わない」「ほとんどそうは思わない」の 5 件法で保育者効力感尺度（文献 11）も合わせて使用した。研修の実施前、実施後で調査を実施し、t 検定を用いて統制群、実践群の研修効果を検討した。さらに「プロセス」の検討では、統制群、実践群それぞれの群において、研修プロセスをビデオカメラでの録画を実施し、その人の内面における体験のあり方に着目する概念である体験過程を測定する評価基準である体験過程スケール（Experiencing Scale）（文献 12）を基準に評定者 2 名が研修内での受講者の発言を評定した。

4. 研究成果

震災直後に福島県で新任であった保育者の「保育者アイデンティティの形成過程」について検討した結果、18 の概念、5 のカテゴリーが生成され、多くのカテゴリーと関連する【転機カテゴリー】がコア・カテゴリーとして位置づけられた。概念の流れについては Fig.1 のとおりである。【通常困難カテゴリー】において震災後の保育者の職務に当たる上での困難プロセスが明確になった。また、同時に【震災困難カテゴリー】のプロセスが同時におきながら、震災後の一時的な戸外遊びなどの制限による特別な環境下における未経験を同僚や上司の[真似をする][やり方を教わる]ことによって、子ども達を[安心させる多様なやり方を実感した]のであった。

そして「柔軟に対応できた」というプロセスが明確になった。一方で、【安定カテゴリー】として保育で「気づくことを大事に思う」中で「充実感を味わう」プロセスがあり、【確立カテゴリー】においては「素敵な先輩に憧れる」「尊敬できる保育士になりたい」と思い、「仕事を続けたい」と意欲が高まるプロセスが明らかになった。そして、【転機カテゴリー】として「周囲との信頼関係を実感する」「子どもの成長を喜び合う」こと、仕事に「見通しを立てる実感がわく」プロセスが明らかになった。通常、震災にかかわることで困難があったとしても、職場の同僚や上司との関係の中で、転機が訪れ、保育者アイデンティティの確立に向けて安定した経験を得ているというプロセスが明らかになった。これらのことにより、危機・困難・揺らぎの体験が振り返りをもたらし、保育者アイデンティティにとって大きな役割を果たすと考えた。また、その際、上司や同僚において、理想に近い保育者と出会うことが重要であることも明らかになった。さらには、福島県の保育者は、震災直後に経験できなかった保育スキルを重要他者から懸命に学ぼうとする姿がみられ、少なくとも、震災の体験や震災後の保育の特別な状況が保育者アイデンティティの形成過程に大きく影響を与えているものと考えられる。職場やつながりがある人達との関係性が危機や転機にかかわっていることも考えられるため、福島県における震災後の保育士に対して、関係性を重視できる対話的アプローチの要素を取り入れた研修が必要であると考える。

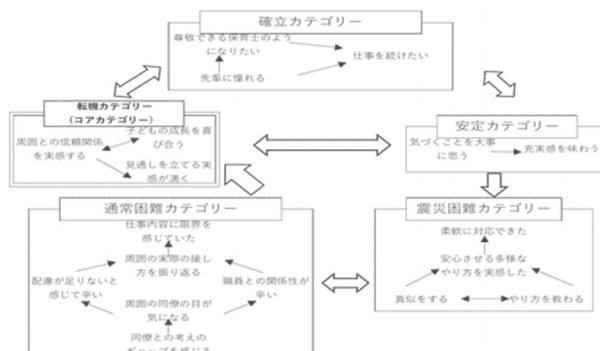


Fig.1 震災後の新任保育者の保育者アイデンティティ形成過程

次に、震災直後に福島県で新任であった保育者の「保育者の自己形成プロセス」について検討した結果、29 の概念、5 のカテゴリーが生成され、多くのカテゴリーと関連する【東日本大震災後の状況】がコア・カテゴリーとして位置づけられた。概念の流れについてはFig.2 のとおりである。新任保育者のため【上司・同僚との関係】で「上司・同僚と良好」であると「安心して仕事に従事」でき、「上司・同僚と悪化」すると「自分を責め自信喪失」へとつながっていき、いずれにしても「仲間のフォロー」を受けながら従事するプロセスが明確になった。【異動した園の保育内容】で「好感が持てる保育」であるか、「意思決定ができない保育」であるのかによって「仕事への没頭」ができるか「反発・不安」を経て「忍耐」しながらいずれにしても保育者としての「成長の実感」へとつながるプロセスが明らかになった。【地域の特性】では「保護者との関係」や「地域住民との関係」が「支え合いの実感」につながり、「貢献感」を持つことプロセスへとつながっている。【結婚・出産】では、「家族の意識化」をすることで「家族のサポート」を実感できるとともに「職場との距離感の変化」を感じ、「客観的な振り返りの機会」が増え、「多様な視点の獲得」に至っていることが明らかになった。【東日本大震災後の状況】では、「当初は制限された環境下での保育」の中で「実践での試行錯誤」や「保育の学びの変化」が起き、やがて、「日常生活を取り戻し」、「乗り越えた自信」につながっていった。「制限下の保育からの脱却」をする中で、平常時の保育実践が少ない保育者は「先輩からの保育伝達」が行われ、子どもの命を引き受けているという若い時の経験から「更なる成長への努力」へとつながっていることが明らかになり、震災後の経験から保育者としての成長志向的なプロセスを捉えることができた。

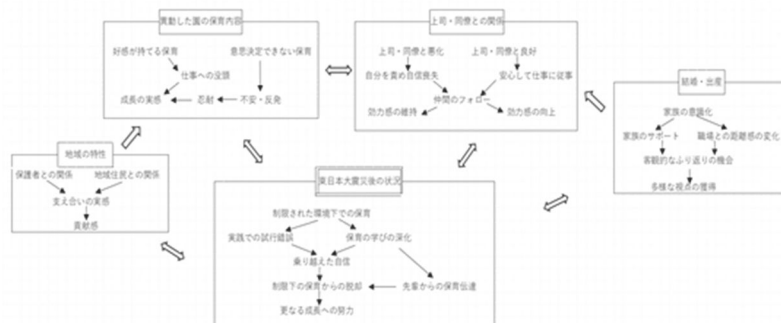


Fig.2 震災後の新任保育者の自己形成プロセス

震災後の新任保育者の保育者アイデンティティ形成過程と自己形成プロセスの検討結果より、従来の研修内容の統制群と省察ができる機会を設けた対話型アプローチの研修内容の実験群に分けて、統制群と実験群で省察項目（自己考慮）(Table.5)の得点の差がないかどうかをみるために、対応のないt検定を実施した(Table.6)。その結果、有意な差がみられなかったため、統制群と実験群では等質の集団と見なして、プログラムの効果を測定した。統制群の実施前と実施後のt検定はTable.7のとおりであり、有意な差がみられなかった。そのため、統制群における省察項目については実施前と実施後とでは効果がみられなかったといえる。同様に実験群の実施前と実施後のt検定はTable.8のとおりであり、有意な差がみられなかった。そのため、実験群における省察項目については実施前と実施後とでは効果がみられなかったといえる。よって、統制群の従来からの研修プログラムも実験群の対話型アプローチの研修プログラムも省察項目（自己考慮）においては効果がみられなかったといえることができる。

Table.5 省察項目（自己考慮）(文献10)

1.子どもと話した後、自分の言い方が適切かどうか考えることがある
2.保育者としての自分の長所・短所を考えることがある
3.子どもに何か言う前に、自分の言動の影響を考えることがある
4.子どもに何か言った後、そのときの自分の感情について考えることがある
5.自分の保育の方針を振り返り改善すべきところを考えることがある
6.「子どもを保育する」とはどういうことか考えることがある

Table.6 実施前のt検定結果（省察項目）

		N	M	SD	t 値
省察項目 (自己考慮)	統制群	7	21.9	1.57	.17n.s
	実験群	6	22.0	1.41	

* $p < .05$

Table.7 統制群における省察項目のt検定結果 **Table.8 実験群における省察項目t検定結果**

統制群		N	M	SD	t 値
省察項目 (自己考慮)	実施前	7	21.9	1.57	.11n.s
	実施後	7	22.7	1.50	

* $p < .05$

実験群		N	M	SD	t 値
省察項目 (自己考慮)	実施前	6	22.0	1.41	.30n.s
	実施後	6	22.5	1.76	

* $p < .05$

次に、震災後の新任保育者の保育者アイデンティティ形成過程と自己形成プロセスの検討結果より、従来の研修内容の統制群と省察ができる機会を設けた対話型アプローチの研修内容の実験群に分けて、統制群と実験群で保育者効力感尺度 (Table.9) の得点の差がないかどうかをみるために、対応のないt検定を実施した (Table.10)。その結果、有意な差がみられなかったため、統制群と実験群では等質の集団と見なして、プログラムの効果を測定した。統制群の実施前と実施後のt検定はTable.11のとおりであり、有意な差がみられなかった。そのため、統制群における保育者効力感尺度については実施前と実施後とでは効果がみられなかったといえる。同様に実験群の実施前と実施後のt検定はTable.12のとおりであり、有意な差がみられなかった。そのため、実験群における保育者効力感尺度については実施前と実施後とでは効果がみられなかったといえる。よって、統制群の従来からの研修プログラムも実験群の対話型アプローチの研修プログラムも保育者効力感においては効果がみられなかったといえることができる。

Table.9 保育者効力感尺度（文献11）

1.私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う
2.私は、子どもの能力に合った課題を出すことができると思う
3.保育プログラムが急に変更された場合でも、私はそれによく対応できると思う
4.私は、どの年齢の担任になっても、うまくやっていけると思う
5.私のクラスにいじめがあったとしても、うまく対応できると思う
6.私は、保護者に信頼を得ることができると思う
7.私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う
8.私は、クラス全体に目をむけ、集団への配慮も十分できると思う
9.私は、1人1人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う
10.私は、子どもの活動を考慮し、適切な保育環境（人的、物的）に整えることに十分努力ができると思う

Table.10 実施前のt検定結果（保育者効力感）

		N	M	SD	t 値
保育者効力感	統制群	7	30.9	2.97	.89n.s
	実験群	6	29.2	3.76	

* $p < .05$

Table.11 統制群の保育者効力感のt検定結果

統制群		N	M	SD	t 値
保育者効力感	実施前	7	30.9	2.97	.36n.s
	実施後	7	29.3	2.63	

* $p < .05$

Table.12 実験群の保育者効力感のt検定結果

実験群		N	M	SD	t 値
保育者効力感	実施前	6	29.2	3.76	.61n.s
	実施後	6	29.3	4.23	

* $p < .05$

さらに、統制群、実践群それぞれの群において、研修プロセスをビデオカメラでの録画を実施し、その人の内面における体験のあり方に着目する概念である体験過程を測定する評価基準である体験過程スケール (Experiencing Scale) (文献12) を基準に評定者2名がビデオ録画を確認の上、研修内での受講者の発言を評定したが、統制群、実験群ともに受講者の発言に体験過程スケール (Experiencing Scale) の1、2、3段階の日常会話レベルの発言は確認できたが、4～7段階の発言を確認することができなかった。

以上のことから、対話型プログラム研修も日常の研修も東日本大震災から9年経った保育者にとっては、時が経ちすぎてしまい、研修プログラムを若干工夫したからといって、保育者効力感や省察の変化に期待しすぎるのは誤りであることが示された。しかし、明らかに、震災後からのプロセスを鑑みたときに、震災後に関連した経験が保育者の成長プロセスに影響を及ぼしながら、未経験だったことは先輩保育者からの保育伝達が行われ、震災という困難を経験したからこそ、保育者として成長し続ける成長志向的な側面が現在でもみられることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 守巧 齊藤崇	4. 巻 27
2. 論文標題 福島県中通り地方における震災後の保護者支援の実情 - ナラティブの分析から -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 乳幼児教育学研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 守巧 齊藤崇	4. 巻 3
2. 論文標題 保育経験年数別にみる子育て支援の特徴 -現職者に求められる子育て支援研修プログラムの解明-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育者養成教育研究	6. 最初と最後の頁 35-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 守巧 齊藤崇	4. 巻 9
2. 論文標題 保育者による保護者支援における実践内容の実態 保護者支援から子育て支援に向けての基礎的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育文化研究	6. 最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 齊藤 崇
2. 発表標題 保育者アイデンティティのプロセスに関する研究 福島県で働く中堅保育士に焦点をあてて
3. 学会等名 日本保育学会第70回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----